

茨城大学の今を伝える情報誌 [アイアップ]

up

Ibaraki University
Press

14

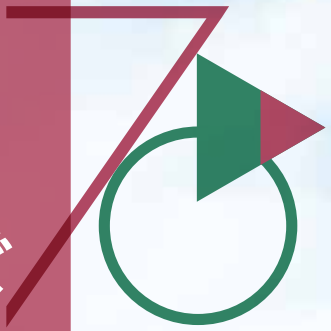
茨城大学
Ibaraki University

今、あらためて、
未来の日本の教育と、大学の本質を問う

茨城大学創立70周年記念号

茨城大学創立70周年 われわれは何者で どこへ行くのか —— 歴史と未来に捧ぐ

2019年、茨城大学は創立70周年を迎えます。地域の“知の拠点”として、歴史を刻みながら、のべ9万4千人余りの卒業生や修了生を輩出してきました。国立大学の法人化から15年。社会の構造や技術が大きく変化する中で、今あらためて茨城大学の未来像も問われていると言えます。70年の節目に、「茨大」を一緒に見つめてみませんか。



CONTENTS

02 目次

特集
茨城大学創立70周年
われわれは何者でどこへ行くのか —— 歴史と未来に捧ぐ

04 温故知新に映る 茨大の未来とミッション

10 70周年の新学問「イバダイ学」 茨城大学って、何ですか

(講義) 節目の年にみずからに問う、
茨城大学のアイデンティティとは……。
荻谷 剛彦さん オックスフォード大学教授

(交流) ディスカッション「イバダイ学」を考える問い
「残る『知』とは何か？」
「大学における『学び』とは何なのか？—過去・現在・未来」
「いばらきのイノベーションと雇用—大学は何ができる？」
「グローバル化ってしなきゃいけないんですか？」
「地域空間と大学—キャンパスは進化する？」

16 ALUMNI わが誇りの先輩たち
藺田 哲平さん 福井県立恐竜博物館研究員

20 iUP TOPICS

22 OBカメラマン瀬能啓太のキャンパス探訪「@ホームカミング編」

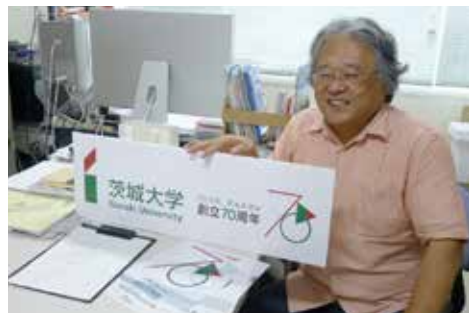


1

温故知新に映る

茨大の未来と IBADAI MISSION ミッション

キャンパスのあちこちで目にする「70周年」ののぼりや垂れ幕。阿見キャンパスには新しいフードインベーション棟が建ち、日立キャンパスの正門は装いに新たに整備され、水戸キャンパスでも福利会館(学生生協)がリニューアルされます。創立70周年、その節目に茨大の歴史をかみしめながら、みんなで未来を展望したい、そんな思いで、ここに70周年を迎える茨大の一端を記します。



創立70周年記念事業のロゴマークを制作した教育学部の島田裕之教授。「創立70周年から2024年に迎える創基150周年に向けて「バトンを渡す」ことをイメージしたという。



「70年、そんなに歴史があるなんて」

2月、第4クォーターが終わり、学生たちの姿もまばらになった水戸キャンパスの図書館に集まる1年生たちの集会を訪ねた。新しく開発するスイーツの名称を決めている最中だ。

「・・・こんな感じかな」「全部、英字にするか」「『うまかっぺ』も、可愛いけどね(笑)」

グループの名は、「日本一つながる学食プロジェクト(通称・つな食)」。水戸キャンパス内にある茨苑会館食堂を拠点に、食と地域をテーマにした活動をしている学生たちだ。

茨大の創立70周年を記念したスイーツは、名づけて「いばだいふいなんしえ」。 「茨城と茨城大学をもっと多くの人に知ってもらおう」というコンセプトを込めて、サツマイモ、栗など県産の食材を使った菓子に仕上げた。

プロジェクトメンバーの一人、農学部1年生の小林登和さんは、「茨大が70年と知って、そんなに歴史があるんだと初めて意識しました。学内でもあまり知られていない気がして、何かできないかと思ったんです」と語る。

制作時期が学年末試験の時期と重なりながらも、茨苑会館食堂を運営する株式会社坂東太郎の担当者などと協議を重ね、3月にはパッケージサンプルなどとともに試作品が完成。試食会に参加した三村信男学長からも「素晴らしい記念品が出来ましたね!」と太鼓判をいただいた。春休みを返上しての奮闘は、4月の製作ラインに向けてさらに続く。慌ただしい中にも、学生たちの屈託のない笑顔には充実感がにじむ。お披露目は、5月に開催される70周年記念式典。式典でのお土産として配られる他、茨苑会館食堂などでの販売を予定している。



日立キャンパス(写真左)では正門付近を整備し、敷地内にコンビニを設置。より広々とした開放感のあるスペースを確保する。阿見キャンパスには食品衛生管理の国際規格HACCPの教育などを実施する「フードインベーション棟」が完成(写真中央)。水戸キャンパスでは福利会館(写真右)がリニューアルされる。

だが、日本文化の中心地となるような立派な学風を樹立してもらいたい。諸君こそが茨城大学の先頭である。野心満々たれ。」――。

先輩たちの姿から「今」が見えてくる

こうして誕生した茨城大学の本部、文理学部、教育学部は、旧日本軍の旧東部三十七部隊(歩兵第二連隊)の兵舎跡地に置かれた。現在の水戸キャンパスである。

当時土浦市の元海軍航空要員研究所跡に移転していた茨城師範学校を経て、教育学部の一期生となった彫刻家の後藤末吉名誉教授は、土浦の予科練の兵舎で1年間学び、翌年サンナナ(三十七部隊)の兵舎へ移った。「生きるのに精一杯だったから、将来のことなど考える時間はなかった」と、多少心得ていた彫塑を専門に学ぼうと、故・稲村退三教授の助手に。「残った以上は一生懸命やるしかない」と腕を磨いた。

後藤名誉教授は、「努力しがいのある大学だった」と、茨大の草創期を振り返る。茨大の教員となった後の1961年、後藤名誉教授は体育専門の学生をモデルにした銅像作品を日展に出品。「思い入れのある作品だから、ぜひ大学に残したい」と、約50年後の2002年に寄贈されたのが、水戸キャンパス図書館の正面に立つ「覇者」の像である。

工学部は、戦時体制下の技術者拡充を図るため、1939年に日立製作所と茨城県が設置した多賀高等工業学校(後に多賀工業専門学校と改称)を前身として多賀町(現日立市)に発足した。

戦後の学制改革により、1949年、「国立学校設置法」が公布・施行され、69の新制国立大学が発足した。戦前から都道府県に所在していた旧制大学、旧制高等学校、師範学校などはこの新制大学に再編。茨城大学は旧制水戸高等学校、多賀工業専門学校、茨城師範学校、茨城青年師範学校を包括し、文理学部・教育学部・工学部の3学部から創設された。その後、1952年に県立農科大学が農学部として合流し、今につながる骨格ができた。

学生募集は同年5月に出され、当時の新聞の広告によれば、「募集定員 文理学部一六〇名 工学部二〇〇名 教育学部六六〇名」「願書受付 五月十三日から二十六日まで」「試験期日 六月十五日から十八日まで」とある。初日の試験科目は数学と国語、2日目は外国語と社会、3日目は理科と身体検査(同、4日目)が課せられた。第一回の合格発表は6月26日だった。

第一回入学式は、7月20日。32度を超える炎天下の野外で挙行された。鈴木京平初代学長の式辞は以下のような訓示だった。

「世の中には進学の希望と資質を持ちながら、経済的その他の事情で志を遂げることができなかった者も数多くあることを忘れてはならぬ。諸君は最高学府の学徒として高い教養を受けるわけであるから、在学中はもとより卒業後もそれだけの責任を果たさなければならない。大学は教養の高い豊かな人間の養成に努めるが、諸君自身も個性を大いに伸ばしてもらいたい。茨城の地は日本歴史上文教の地として異彩を放っている。時勢は移り世は変わっ



ビジュアル年表プロジェクトとは

卒業生へのインタビュー映像や茨城新聞の記事などの貴重な資料で振り返る「茨大ビジュアル年表」を制作しています。本学が社会の中で果たした役割や実績を多角的に振り返るデジタルコンテンツは、創立70周年記念式典にあわせて公開予定です。



「ビジュアル年表プロジェクト」は参加した現役生たちに新鮮な感動をもたらした。「(学内紛争の時代の記事で)今日は窓ガラスが割られたとか、逮捕者が出たとか、そういう記事を読んではハラハラして。事態が落ち着いたとすると、自分も安心しましたね(笑)」(小平さん・左)「学長選挙の記事もありました。誰が有力とか、結構大々的に書いてあって、そういうことにも注目されていたんだって、面白かったです」(鶴見さん・右)、5月の記念式典に合わせた公開を予定している。

1949

新制茨城大学、文理学部・教育学部・工学部の3学部で開学。同年7月20日に第1回入学式が挙行された。



1965

学生会館(茨苑会館)竣工。翌年、大学講堂竣工。

1967

文理学部を改組、人文学部・理学部・教養部を設置。

1952

茨城県立農科大学(前身:霞ヶ浦農科大学)を移管し、農学部を設置。



1953

第1回卒業式および第3回修了式が挙行され、457名の卒業生と227名の修了生が学位授与。



1957

溜沼臨湖実験所落成式(現・広域水圏環境科学教育研究センター)



1955

五浦美術研究所(現・五浦美術文化研究所)発足。

1969

農学部、教養部の校舎が全共関係学生により封鎖・占拠。



1976

共通一次試験実施要項制定。(第1回実施は1979年)



1985

東京農工大学大学院連合農学研究科(博士課程)の構成大学となる。



1996

教養部を廃止し、人文学部にコミュニケーション学科を設置。

2004

国立大学の法人化に伴い、国立大学法人茨城大学となる。

2009

宇宙科学教育研究センター、旧茨城衛星通信センターのパラボラアンテナを電波望遠鏡として再活用開始。

2017-18

人文学部を人文社会科学部3学科体制に改組、教育学部の一部改組、農学部2学科に改組。工学部を学科統合により5学科に改組。

2019

創立70周年記念事業実施。

茨城師範学校の女子部を卒業し、帝国女子理学専門学校(現東邦大学)に在籍していた今橋(旧姓:山崎)博子さんは、茨大の学生募集の報を聞き、工学部の一期生として入学した。工学部で最初の、そして唯一の女性だった。
「印象に残っているのは、成績(入試結果)が学生課に貼り出されて、私たちはそれを書き写して提出したこと。女は私一人だったものだから、すぐに成績がみんなにわかっちゃうでしょ。非常に恥ずかしい思いをしたのは覚えています(笑)」
2年目から多賀に引っ越し、常北太田駅と鮎川駅を結ぶ日立電鉄(2005年廃止)で通学。「みんなでソロソロ」と荒

野原を歩き、鮎川に掛かる丸太棒を橋代わりに渡って校舎へ向かったという。
茨城大学では翌1952年、旧海軍航空隊跡地を利用して設立された霞ヶ浦農科大学の後進である茨城県立農科大学を併合し、農学部が新設された。その後、1967年には「人文学部」「理学部」が設置され、70年代から90年代初頭にかけて5学部すべてに大学院が設けられた。
人文学部の一期生となった村上主税さんの大学時代は、学生運動の真っ只中だった。授業はほとんどなく、成績・評

価はレポート。「年間で300本見るくらい」の映画三昧だった。「他人から見ると、だから何だというでしょうが、私にとってはこれが非常に大事な時間だったんですね。必要なる無駄というか」(村上さん)。村上さんは卒業後、東宝株式会社に就職。平成18年から4年にわたり、取締役兼TOHOシネマズの代表取締役を務めた。「学生時代という時間は、一生ない。その間に何か自分に自信が持てるような、人には負けないものを築いてほしいですね」と後輩たちにエールを送る。

こうした大学の歴史とその証を語り継ぐ卒業生たちの言葉を、インターネット上でわかりやすく閲覧できる形にしようという取り組みがある。題して、「茨城大学ビジュアル年表プロジェクト」。記念事業準備室の呼びかけで集まった10名の学生たちが昨年の夏から、地方紙である茨城新聞に掲載された過去70年分の茨大の記事を丹念にたどり、地域社会に投影された茨城大学の歴史を「目で見てわかる」年表として制作してきた。
プロジェクトに参加した教育学部4年生の小平絢子さ



2018年暮れに、創立70周年記念メニュー「茨大丼」(仮称)の試食会が水戸キャンパス生協で開かれた(写真右)。用意された丼ぶりは5種類。年明けから生協で試行的に販売され、人気は上々だ。

んは、「私が読んだ当時の記事(60年代半ば)には、まだ筑波大も、常磐大もなかった時代でした。茨城に茨大しかなかった時代。この地域にとって、(茨大が)どれだけ大きな存在だったのかが、記事の扱いからよくわかりました」と、今では取り上げられないような小さな話題さえ掲載されていた扱いに、茨大の存在意義を実感したようだ。

1970年代の記事を辿った人文学部4年生の鶴見奈々さんは、その時代ごとの茨大生の様子や大学生活を知ること、今までになかった大学への「親近感」を感じるようになったという。「私は4年間しか在籍はしていませんが、この大学には歴史があって、先輩たちがいて、こんなに素敵な出来事があったんだなということを誇りに思えました」と

語りながら、この70周年の機会を後輩たちにも「自分たちの大学を誇りに思いたい機会にしてほしい」と願っている。

茨城大学の未来と大学の教育のこれからを展望して

2004年の国立大学法人化から、15年。自主・自律的な運営体制が求められ、国立大学では国から支給される運営費交付金が年々減額され、教育や研究に充てる資金調達が喫緊の課題となっている。

一方、人口減少社会において、地方創生やイノベーション創出などに関する社会から大学への期待・要請は高まっ



茨城の味覚を通して、「創立70周年への意識を高めたい」と春休み返上で奮闘する「つな食」の学生有志たち。完成したスイーツ「いばだい・ふいなんしえ」は、学内外へ「茨大70周年」をPRする。

ており、それ故に厳しい目にもさらされている。

今年、多くの新制国立大学が70年の節目を迎えるが、それぞれに、地域に根ざした大学としての自負があるだろう。茨城大学も然りである。

茨大とは、何か。大学はどこへ行くのか。

この70周年を機に、これまで取り組んできた様々な歩みを振り返り、これからの大学教育に結実させる試みが、今、始まろうとしている。70周年は、茨城大学の未来を、大学教育の未来を占う、意義深い節目の年なのである。

茨城大学創立70周年記念事業 公式WEBサイト
http://www.ibaraki.ac.jp/70/



茨城大学創立70周年一創基150周年記念事業準備室・小池和人さんからの「茨城大学創立70周年記念事業」紹介

茨城大学の創立70周年を記念し、地域の“知の拠点”としての歴史を振り返り、将来の展望を考える機会にするとともに、未来の社会を担う学生の学修環境を向上させるキャンパス整備事業や、新しい教育のチャレンジを展開します。

【キャンパス整備】

より快適で発展的な学修環境を実現

水戸キャンパスの福利会館(学生生協)は、食堂をリニューアルし、学生や地域の方々の憩いの場としての機能を充実させます。日立キャンパスの正門付近は、開放的な景観に整備し、より開かれたキャンパスとして生まれ変わります。阿見キャンパスには、地域の食の未来を支えるフードイノベーション棟を新設します。



【カリキュラム】

はばたく茨大生たちを支える

新しい教育のチャレンジ

3年次の学生たちが海外研修や地域活動などに取り組む「iOP



(internship Off-campus Program)」が、2019年度から本格展開されます。未来へはばたく、たくましい茨大生を育てていく茨大の新たなチャレンジです。

【茨大ビジュアル年表プロジェクト】

大学の歴史をデジタルコンテンツで

卒業生へのインタビュー映像や茨城新聞の記事などの貴重な資料で振り返る「茨大ビジュアル年表」を制作しています。本学が社会の中で果たした役割や実績を多角的に振り返るデジタルコンテンツは、記念式典で公開予定です。



【みんなの“イバダイ学”プロジェクト】

これからの「茨大」を考えよう!

大学はどうあるべきか、茨大は何をめざすのか、この命題

に学生・教職員と地域の方々とともに思索を深め、語り合いながら茨城大学のビジョンを構想するプロジェクトです。



記念式典等のご案内

茨城大学創立70周年記念式典

開催日 2019年5月25日(土)

会場 茨城大学水戸キャンパス講堂(水戸市文京2-1-1)

内容 「茨大ビジュアル年表プロジェクト」・「みんなの“イバダイ学”プロジェクト」のプレゼンテーション、学生活動の発表等を予定しています。

茨城大学創立70周年記念講演会

開催日 2019年10月26日(土)

会場 一橋講堂(東京都千代田区一ツ橋2-1-2学術総合センター内)

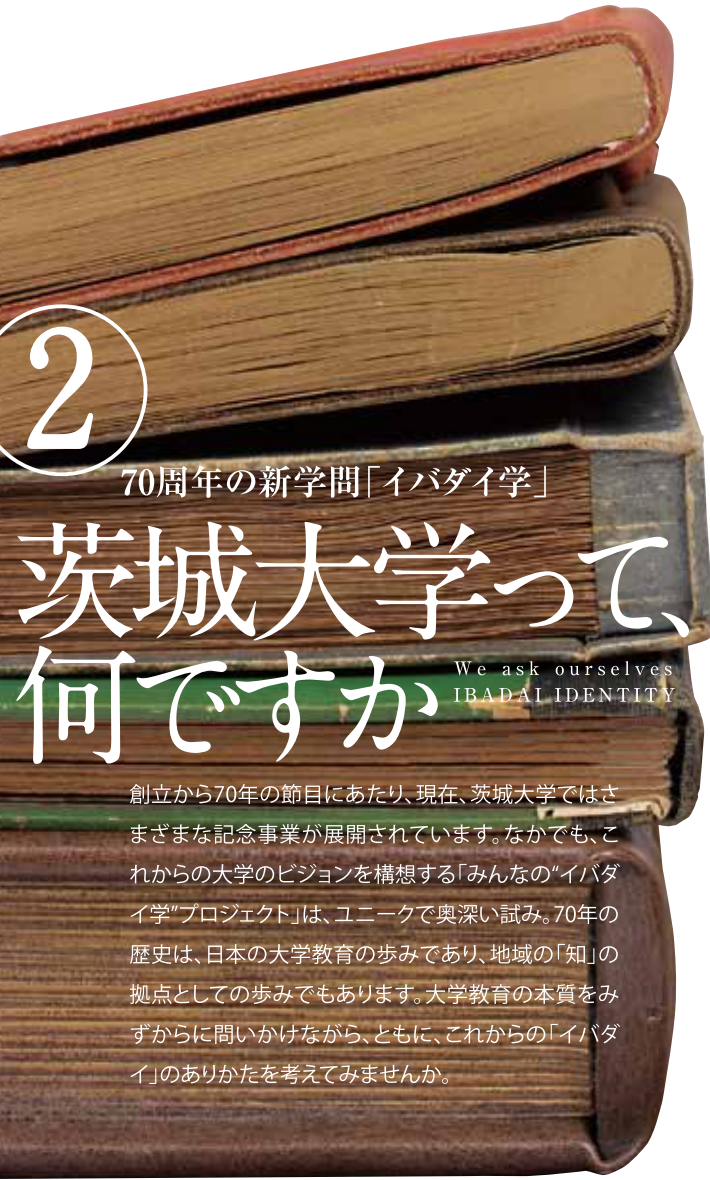
理学部の岡田誠教授による記念講演『チバニアンと地質時代』のほか、大学の近況報告、懇親会など。

申し込み 茨城大学創立70周年記念事業ホームページより

URL: http://www.ibaraki.ac.jp/generalinfo/alumnus/union/homecomingday/entry/

沿革・歴史

1949年 5月	茨城大学開学
1952年 4月	茨城県立農科大学を国に移管し、本学農学部設置
1955年 6月	五浦美術文化研究所設置
1955年 7月	工業短期大学部併設
1967年 6月	文学部を改組し、人文学部・理学部・教養部設置
1968年 4月	大学院工学研究科(修士課程)設置
1969年 1月	地域総合研究所設置
1970年 4月	大学院農学研究科(修士課程)設置
1973年 4月	保健管理センター設置
1979年 4月	大学院理学研究科(修士課程)設置
1985年 4月	東京農工大学大学院連合農学研究科(博士課程)の構成大学となる
1988年 4月	大学院教育学研究科(修士課程)設置
1989年 5月	共同研究開発センター設置
1991年 4月	大学院人文科学研究科(修士課程)設置・機器分析センター設置
1992年 4月	生涯学習教育研究センター設置
1993年 3月	工業短期大学部を廃止
1993年 4月	大学院工学研究科(博士課程)設置
1995年 4月	大学院工学研究科(博士課程)を大学院理工学研究科(博士課程)に名称変更
	大学院理学研究科(修士課程)を廃止し、大学院理工学研究科(博士課程)に再編成
	教養部を廃止
1996年 3月	大学教育研究開発センター設置
1996年 4月	広域水圏環境科学教育研究センター設置
1997年 4月	遺伝子実験施設設置
1999年 4月	留学生センター設置
2001年 4月	学生就職支援センター設置
2002年 4月	国立大学法人茨城大学設立
2004年 4月	学術情報局設置・同局に図書館及びIT基盤センター設置
2005年 7月	大学教育研究開発センターを大学教育センターに改組
2006年 4月	入学センター及び地球変動適応科学研究機関設置
2006年 5月	農学部附属農場を附属フィールドサイエンス教育研究センターに改組
2006年 10月	
2008年 4月	フロンティア応用原子科学研究センター設置
2009年 5月	産学官連携イノベーション創成機構設置・宇宙科学教育研究センター設置
2010年 4月	教育振興局、学術振興局設置
2013年 4月	社会連携センター設置
2016年 4月	全学教育機構設置・全学教職センター設置・大学院教育学研究科(専門職学位課程)設置
2016年 5月	入学センターを廃止し、アドミッションセンター設置
2017年 4月	人文社会科学部設置・人文科学研究科(修士課程)を人文社会科学研究科(修士課程)に名称変更・教育振興局、大学教育センター、留学生センター、学生相談センター、学生就職支援センターを廃止し、全学教育機構に再編成
2018年 1月	研究・産学官連携機構の設置



2

70周年の新学問「イバダイ学」

茨城大学って、 何ですか

We ask ourselves
IBADAI IDENTITY

創立から70年の節目にあたり、現在、茨城大学ではさまざまな記念事業が展開されています。なかでも、これからの大学のビジョンを構想する「みんなのイバダイ学プロジェクト」は、ユニークで奥深い試み。70年の歴史は、日本の大学教育の歩みであり、地域の「知」の拠点としての歩みでもあります。大学教育の本質をみずから問いかけながら、ともに、これからの「イバダイ」のありかたを考えてみませんか。

講義

節目の年にみずから問う、
茨城大学のアイデンティティとは・・・。

オックスフォード大学
社会学科およびニッサン現代日本研究所教授

荻谷 剛彦

〈プロフィール〉荻谷剛彦（かりや・たけひこ）
1955年生まれ。オックスフォード大学社会学科・ニッサン現代日本研究所教授、Ph.D.（社会学）。東京大学大学院教育学研究科教授を経て、2008年から現職。著書に『オックスフォードからの警鐘—グローバル化時代の大学論』（中央新書ラクレ）など。

久しぶりに日本の大学の教壇に立つと、とても効率がいい講義であることに気がつきます。声は教室の奥まで届く、黒板に書けば学生がみなノートに写し一斉に知識を蓄えてくれる。最後はそれを覚えたかどうか、試験で評価する。日本人に根付いた思考の型は、まさにここにあります。

知識は「外」にあるという神話

日本の大学のルーツは、今から150年前、富国強兵と殖産興業をもとにした新しい近代国家づくりに原点があります。当時の日本では、内生的な知識で欧米の列強国に対抗できませんでした。日本は知識を外の世界へ求め、優秀な人材を海外に派遣し、また海外の教員たちを日本に招いて、新しい知識や技術を外国の言葉で学ばせることを始めたわけです。その受け皿となったのが帝国大学です。

当時のトップレベルの研究や教育は、西洋語で行われていました。他の非西洋諸国は多くが植民地化されましたから、そこでエリートになるためには西洋諸国の言語を学んでいきました。ところが日本では、帝国大学が設立されて20年ほどすると、その卒業生たちは教員として現在の私立大学にあたる専門学校などで、日本語で講義をするようになりました。講義録も日本語で出版され、知識の日本語化が急速に進んだのです。

大学教育が日本語化された一方で、「知識は外在する」という意識は変わらず、「学ぶ」＝「知識を受容する」という認識が定着していきました。

帝国大学を頂点とした知識の流れと教育の階層化はこ

うして生まれ、なかでも重要視されたのが法律の知識でした。近代日本は法治国家を作ろうとしたわけですから、法学的な思考が近代国家建設の基盤になったわけです。

エセ演繹型思考に陥るな

日本における法学的思考は、外国の制度で良いものがあつたら、その理念をもとにどう法律にできるかを考える、「演繹」的な思考様式が強かったと私は考えています。抽象的な命題から、抽象度を下げて考えるという思考。つまり、外国の法典や憲法という上位法があつて、それを元に次の法律を考えるという方法です。

これに対して、物事の考察には、現実から考えて理念を具体化していく「帰納」的な思考もあります。自然科学や社会科学は本来こうした「帰納型」の学問ですが、日本の社会科学も、海外の学者の理論や概念を日本に紹介することに長く研究の重きを置いてきましたから、「演繹型の社会科学」と言わざるを得ません。

本来なら、この演繹と帰納がうまく両立しながら物事を考えていくことが極めて合理的で論理的な考え方なのですが、日本は近代化のもつて、演繹型思考が勝っていくこととなります。

抽象的なキーワード、それも流行り言葉を若干具体化して言い

換えただけで、わかったつもりになってしまう・・・、私はそういう思考を「エセ演繹型思考」と呼んでいます。現実の経験からの帰納が不十分なまま抽象的な命題を理解したつもりになってしまう。つまり、「大学の課題は何だろうか」と考える時、大学の経験や現状に基づいて課題を挙げるといふよりむしろ、外から来たもつともらしい言葉になびいてしまう傾向に、今の日本の大学の大きな課題があるような気がします。それは文部科学省に従順であるべきか否かという話ではなく、思考様式がエセ演繹型ゆえに、新しいキーワードを与えられると、安易に「うん、そうだ、そうだ。新しく、これをやんなきゃね」と飛びつく傾向。まさに昨今流行語になった「付度」そのものです。

付度というのは、主体的な営みです。波風立わずに巧みに相手に取り入れるために必要なスキル。皮肉なことに、変化の激しい現代社会で生きる上で、付度は極めて主体性のある行為と言えるでしょう。加えて、手段が欠如していますから、やり方がよくわからないので解説本を見ようとする。すると、中途半端な説明、実践例しか書いていない。生半可な理解しかしていませんから、具体的な処方箋は書けません。思考様式そのものを理解せず、わかったつもりでいるものの、その手段がルーズなので、目的を達成できる保証がないまま、結局、形式的なことだけを見せて達成できたつもりになってしまうという、最悪の事態が起きるわけです。



本内容は2018年12月22日（土）に開催された、「みんなのイバダイ学」シンポジウム」の基調講演「大学で学ぶということ——エセ（付度する）『主体性』に絡みとられないために」の内容を抜粋・要約したものです。



講義

みんなの「イバダイ学」シンポジウム・基調講演

荻谷 剛彦

これは「アクティブ・ラーニング」や「主体的な学び」といったワードも同様です。たとえば「主体」とは何か、という具体的な議論はないわけです。これでは、学生たちが大学を卒業後、社会で発揮するのは「付度する主体性」になってしまいます。帰国するたびに、そういう人材が増えている気がしてなりません。

70年の歴史から 大学のミッションが見えてくる

大学で学ぶということは、自分たちが世界の知識、ナレッジ(Knowledge)の生産や再生産に参加しているということとを自覚すること、共有することです。

世界の礎と繋がっているという地続き的な感覚。大学は、トランスナショナルな機関ですから、国家を超える知を作り出せる力を持っていることを誇りにしてほしいです。

日本の強みは、日本語という非常に難しい言語で、近代だけでも150年の経験をさまざまな分野で書き残してきたところにあります。そこには日本だけの経験、西洋語や他の

言語を話す人たちにはない経験が培われています。これを活かさない手はありません。人類のナレッジの一角に日本の知識は参加していけるわけですから。

茨城大学をはじめ、多くの大学が創立70年を迎えます。その多くが大学教育の方向性を自問するなかで、私は、「目的のために何をするか」だけではなく、「我々は、今までにこんなことをやってきた、成し遂げてきた」というみずからの歴史と実績を振り返り、その事実の認定を評価の対象として、帰納的に理念化していけば、おのずと大学のミッションは見えてくると信じています。

大学がこれまでどのようにして社会の変化に対応してきたのか、または出来なかったのかを、歴史を踏まえながらきちんと検証することで、時代の波に右往左往せず、みずからのミッションと「社会の変化に適應できる主体性」を発揮できる学生を育成できるのではないのでしょうか。



交流 ディスカッション

茨城大学や大学そのものを考えるための
“イバダイ学を考える5つの問い”について、
グループに分かれてディスカッションを交わしました。

イバダイ学を考える問い 「残る『知』とは何か？」

1



【ファシリテーター】
人文社会科学部 准教授 乙部 延剛(政治学・公共哲学)
教育学部 准教授 松村 初(グラフ理論)

【ゲストスピーカー】
柴藤 亮介さん
アカデミスト株式会社 代表

【プロフィール】2013年株式会社エデュケーション・デザインを創業。研究者の魅力の中高生に伝えるためのマッチング事業を行った。翌年、日本初の学術専門のクラウドファンディングシステム「academist」を公開。4年間で約100件の研究プロジェクトを立案・コンテンツ作成に携わる。

「残る『知』とは何か？」という問いには、たとえば茨城大学が100周年を迎える30年後まで残っている知とは何かという問題もあれば、大学を卒業した人の中に残り続ける知識とは何かという問題もあります。

ある知が残っている=社会で役に立っている、と定義できそうですが、学術分野に特化したクラウドファンディングを運営しているアカデミスト株式会社の柴藤さんは、ある研究が資金や仲間を得ていくプロセスにおいては、それが「役に立つ」だけでなく、「おもしろい」かどうか重要になると述べました。

また、「役に立つ」かどうかの判断を迫られることで、サイエンスの幅が狭まるという危機感は、フロアの参加者の中で共有されていたようです。ある方からは、「知を生み出すには本来時間を要するものとして、学問における『スピード』に関する世の理解を求める余地があるのではないか」という意見もありました。さらに、研究において生じる「誤り」も、論文として残すことで是正されるものであり、それ自体も「役に立つ」面がある、という主張もありました。さらに乙部准教授は、ある研究分野や学んだ内容自体が忘れ去られても、たとえば「勉強習慣」のような知的な態度としての知は残るのでは、と述べました。

「残る『知』とは何か？」という問いから始まった、「知」と私たちの行動をめぐる問題。研究者のクエスチョンと知のアップデートを促すような、研究データの開放などの努力はますます重要になりそうです。議論の終盤、松村准教授からは、「アカデミズムを社会基盤として捉える」ということも提唱されました。社会基盤としてのアカデミズムに対する大学の責任をしっかりと追究していきたいです。



2 イバダイ学を考える問い 「大学における『学び』とは何なのか？—過去・現在・未来—

【ファシリテーター】
教育学部 教授 佐藤 環(教育学)
全学教育機構 助教 佐川 明美
(高等教育における質保証・IR)

【ゲストスピーカー】
中里 忍さん
Institution for a Global
Society (IGS) 株式会社



【プロフィール】現在、コンペティシーや気質を可視化するサービス「GROW」の国内外の企業の人事部門や教育機関への展開を統括する。慶應義塾大学大学院システムデザインマネジメント研究科にて、教育システムについて研究中。



茨城大学では、教育の「質保証」を積極的に進めています。社会が求める力、大学が学生たちに約束した能力や姿勢を、全員にきちんと身につけて卒業させることを「保証」する取り組みです。ここでは能力に関する各種データを「可視化」することが大事になります。茨城大学の場合は、在学生、卒業生、就職先の企業などに対するアンケート調査を行い、ディプロマ・ポリシー(卒業要件)の達成状況を調べて、授業改善に役立てています。

IGS株式会社が提供しているサービスは、こうした教育の「可視化」「質保証」をさらに推し進め、平準化したものといえるかも知れません。同社では個人の能力を気質、コンペティシー、知識・技能・スキルの三層構造と捉え、最新のAIを活用して評価する「GROW」というアプリを提供しています。

このような、能力の精密な可視化と教育改善、という傾向に対し、フロアからはさまざまな意見が示されました。「可視化は必要だが、方法論に集中しすぎて何のために可視化しようとしているのかを忘れてはならない」「可視化する作業は、自分の今の強みや、将来に向けて伸ばすべき能力がわかって良いのでは」「誰のための評価なのか」などなど。

また、「目標—評価にとどまらない、学びの過程への視点も必要だ」という意見には、結果に出ない広がりや深まりも見られるべき」という意見には、ファシリテーターの佐藤教授も大きく肯いている様子でした。AIの発達で、能力の可視化技術が進んでいるからこそ、可視化できない教育の価値やプロセスを大学自身がきちんと捉えるべき—今回の議論はそのようなメッセージを大学に投げかけているように感じました。

3

イバダイ学を考える問い 「いばらきのイノベーションと雇用 —大学は何ができる?」

【ファシリテーター】

研究・産学連携機構 准教授 酒井 宗寿 (物理化学・社会科学)
全学教育機構 准教授 小磯 重隆 (労働法学)

【ゲストスピーカー】

横田 幸信さん
東大発イノベーション
教育プログラム i.school ディレクター

環野 真理子さん

株式会社リバネス 人材開発事業部
サイエンスブリッジコミュニケーター



【プロフィール】 横田幸信さん イノベーション教育の世界的先駆機関である東京大学 i.school で、2013年度よりディレクターとして活動全体のマネジメントを担当。

【プロフィール】 環野真理子さん 研究促進や産学連携をコーディネートする(株)リバネスにおいて大学生・大学院生向けの研究キャリア発見マガジンの執筆などに関わり、現在は研修やキャリア相談などを行う。



4

イバダイ学を考える問い 「グローバル化ってしなきゃ いけないんですか?」

【ファシリテーター】

全学教育機構 講師 瀬尾 匡輝
(教育社会学・言語教育)

【ゲストスピーカー】

小波津 浩哉さん
宇都宮大学大学院

宮下 裕任さん
株式会社納豆代表



【プロフィール】 小波津浩哉さん 宇都宮大学国際学研究科博士後期課程3年。移民第2世代研究者。リマ生まれのペルー沖繩系日系3世。日本、ペルーで社会経験後に現大学へ。

【プロフィール】 宮下裕任さん NTTやKDDI香港を経て、2016年納豆(香港)有限公司を設立。2018年には日本で株式会社納豆を設立し、世界各国で納豆の普及活動に取り組む。

グローバル化する社会において、地方大学が向き合うべき課題、育てるべき学生の力とは何か、ということを考えるディスカッション。ペルーと日本にルーツをもつ小波津浩哉さんは、移動する生活が多かった自分自身を振り返り、当然語学ができなければコミュニケーションに苦勞するもの、重要なのは言語習得の次の段階になったときの「プラスアルファ」であり、それは「ひとりひとりのブランド」であると話しました。また、海外での豊富な営業活動を経験している宮下裕任さんは、やはり言語以上に必要なものとして、「根性」「パッション」を挙げました。その上で、それらは「ただ外国へ行けば身につくというものではない」という点は、二人に共通した意見です。一方で、2018年12月の入管法改正により、これからは地域社会においても外国人の人口が大きく増えることとなります。国内、地域のグローバル化という状況が顕著になる中、地方の大学には何ができるでしょうか。たとえば、これまで留学生の受け入れを進めてきたという経験を、地域のグローバル化という過程においても活かすこ

とができるかも知れません。ところで、これらのディスカッションに対し、フロアの参加者からは『『グローバル化ってしなきゃいけないんですか?』というテーマなのに、グローバル化を前提とした話になっている』という率直な指摘もありました。確かに私たちは、経済のグローバル化を前提とし、それらにどう対応するか、という視点で大学を語りがちです。しかし、実際には国境を越えたり、あるいは境目そのものが不確かなものになったりすることが、さまざまなレベル、領域で起きています。これらひとつひとつの動きと大学が真摯に向き合い、帰納的に課題を捉えていく必要があるようです。



5

イバダイ学を考える問い 「地域空間と大学 —キャンパスは進化する?」

【ファシリテーター】
工学部 講師 辻村 壮平 (環境心理学)

【ゲストスピーカー】
ウエスギ セイタさん
YADOKARI株式会社 共同代表



【プロフィール】 ソーシャルデザインカンパニー「YADOKARI」として、暮らしに関わる企画プロデュース、タイニーハウス企画開発、遊休不動産と可動産の活用・施設運営、まちづくり支援イベント・ワークショップなどを手掛ける。

これからの新しいキャンパスを考える上で、不動産ではなく「可動産」という魅力的な考え方を紹介したのが、YADOKARI株式会社・ウエスギさんです。同社ではまさに、トレーラー式のタイニーハウスを設計し、たくさんの人たちと一緒に、イベントスペースとして積極的に活用するようなプロジェクトを手がけてきました。自動運転の技術開発が進む中で、自動車会社も、カフェやオフィス、学び



や仕事の場となるモビリティを提案しはじめています。ウエスギさんは、「こうしたモビリティが大学の施設にドッキングできるとしたら、コミュニティとのどんな連携、界限性が生まれるだろう」と参加者に問いかけました。

こうした話題提供に、フロアも大いに刺激を受けた様子。学生が、茨城大学のキャンパス同士の距離が離れている問題を指摘すると、ある教員から、「地域間の移動、モビリティという視点で捉えれば、県内に学びの場が点在していることは強みにもなり得るのでは」という応答がありました。また、水戸キャンパスの近くに住むという方からは、「キャンパスが駅から離れているために、学生と地域の人とお酒を飲みに行くエリアが異なり、“合流”が起こらない」という声もあり、ここからは「車内で講義もできる『イバダイ号』が県内を移動して、夜はバーにも変身」という、夢のような(?)アイデアも生まれました。

これらの議論は、「そもそもキャンパスは必要なのか」という問いにもつながりますが、実際にモノがある、モノをつくる、ということは、コミュニティの創生や愛着につながりそうです。大学の一角、コミュニティハブとなる場所を、「参加型」でつくっていくのも良いかも知れません。



イバダイ学

「みんなの“イバダイ”学シンポジウム」での議論をもとに、現在、茨城大学のビジョンとして、「イバダイ学からの仮説」づくりを進めています。5月25日の創立70周年記念式典で発表予定です。
<http://www.ibaraki.ac.jp/ibadaigaku/>

蘭田 哲平さん Teppei SONODA

福井県立恐竜博物館研究員
(理学部地球環境科学コース 大学院博士後期課程・
2011年度単位満期退学(博士・理学))

学生時代の居場所は、研究室かフィールドでしたね。

福井県勝山市北谷町の手取層群北谷層は、世界的に知られる恐竜化石の産出地。発掘された化石とその研究成果をもとに2000年に開館した、国内最大級の恐竜を中心とする地質・古生物学博物館「福井県立恐竜博物館」で、蘭田哲平は研究員を務める。「勝山恐竜化石群及び産地」として国の天然記念物(地質・鉱物)に指定されたこの地で、カメ化石の調査研究にたずさわる。生まれは、同じ日本海に面する京都府舞鶴市。「亀は万年」の文字通り、万年単位で過去にさかのぼる古生物学の世界に惹かれて茨大へ、そして、北陸の地へ。その歩みを尋ねてみた。

小学生の時に図書室で考古学の本を読んで、おもしろいなと思ったのが始まりでした。児童向けの学習百科シリーズに日本の考古学があって、全巻読んだものでした。そんな頃に、映画『ジュラシック・パーク』(1994年)が公開されて、一大恐竜ブームです。何冊も恐竜図鑑を読んで、すっかり感化されて、興味は考古学から古生物学へ移っていきました。今でも古生物学会などに行くと、脊椎動物化石の研究をしている人から、あの本を読んだとか、幕張で開かれた恐竜展に行ったとか、当時の話題が出たりしますね。

中学、高校と部活中心の毎日、バスケットボールに熱中していました。部活を引退してからですね、やりたかったことを意識したのは、「化石の道に進もう」と。古生物、とりわけ大型化石を学べる大学は当時から少なく、センター試験まであとひと月という時期になって、茨城大学に大型化石を専門にしている安藤寿男先生がいると知って、茨大の資料を取り寄せることに決めました。暮れに資料請求の送金で郵便局に行ったら、ATMの使い方がわからなくて(笑)。お札を入れるところにコインを入れちゃって、ATMを壊したのをよく覚えています。

研究で使うこともあって、どうしてもクルマが欲しくてバイトもしました。長かったのは、ボーリング調査の仕事。茨城県内の圏央道建設の真只中で、地盤の特性や強度を確かめる地質調査業の助手でした。水戸では地下10メートルくらいで建築基準を満たすのですが、つくば周辺はかつて沼沢地が広がっていたので地層が柔らかく、地下80メートルまで掘るんですね。決まった深さで必ず貝化石などが出

てくるのがおもしろかったです。

学部での研究テーマは、いわき市の常磐炭田の地層で、時代的には新生代(恐竜の時代は中生代)。化石というよりは地層の研究で、それぞれの地層がどういう場所で形成されたのか、それがどの順序で起こったのかを復元していくものでした。地層もおもしろかったのですが、化石が出てくると、興味はそっちに傾くんですね。卒論に取り組む頃になって、「大学院に進んで化石をメインにやろう」と決意して、安藤先生と懇意にしている、同じ古生物が専門の平山廉先生(早稲田大学教授)にメールを送ったんです。「まずは、卒論を仕上げたから」と、おふたりの先生に論されて、卒業ギリギリに話がまとまって。結果、茨大の大学院で安藤先生の研究室に残り、古生物研究の進め方の指導を受けながら、具体的な脊椎動物化石の研究については早稲田大の平山先生へ指導を仰ぐことになりました。平山先生に奨められたのは、石川県の白山市白峰地区にある桑島化石壁から発掘されたカメ化石の研究。2つ返事で、「やります」と答えました。

当初は東京に住むことも考えましたが、結局必要なときに水戸から東京に出かけることで十分でした。特に、調査に使う機材や採ってきた化石の標本を置く大きなスペースを確保できたのが茨大の良かったところで、研究室で標本のクリーニングをする部屋と機材を存分に使うことができたのは、ありがたかったですね。

博士課程の一年目などは、一年のうち半分は水戸にいない生活でした。平山先生と一緒に西日本のいろいろな山の中を歩いたり、一人で北陸に行き調査したり。京都大学の研究室の調査に同行して、ひと月半ほどマンマへも行きました。あちこち行きすぎましたね(笑)。おかげで、標本やデータはたくさん集まったのですが、それを論文にまとめる時間をとれなくて…。

ただ、外に出ていることが多かった分、他大学の先生や学生、化石愛好家の方々と交流がたくさん持てたこととはとてもよかったですね。今の仕事にもそれは活かしています。昔から知っている問柄の研究員の仲間などがいて、非常に円滑に仕事が進められます。学生時代にネットワークを軽く作ってきたネットワークみたいなものは、少なからず今の財産ですね。





プロフィール ● 1984年京都府舞鶴市生まれ。2003年茨城大学理学部に入学し、安藤寿男教授(地質学・古生物学)の研究室で学ぶ。大学院理工学研究科博士前期課程を2009年3月に修了後、博士後期課程を2012年3月に満期退学。その後、石川県にある白山市白峰化石調査センターを経て、2014年4月から現職。2014年9月博士号授与(理学)。学位論文の題目は「日本の前期白亜紀スッポン上科カメ類の系統分類および形態学的研究」。

今はスッポンの進化の研究に夢中です。

大学時代の一年下、地質学を専攻していた後輩と婚約。菌田同様、大学での専門を職とし、石川県でジオパークに関わる仕事にも就き、菌田の恐竜博物館での採用を機に入籍した。現在、ふたりの子を抱かっている。上の男の子は、3歳になった。目下の興味は「クルマと仮面ライダー」。化石の物語る生き物の歴史と、子どもの秘める未来が、今の菌田を魅了する。

博士課程3年目が終わろうとしているときに、カメ化石の調査でお世話になっていた石川県で、臨時職員の募集があり、「思い切って、行ってみようか」と思って、水戸を離れました。2年勤めて、今度は福井県で公募が出て。それが今の仕事です。正式に仕事が決まり、晴れて結婚も。問題は、学位でした。

指導教員の安藤先生(左写真・学位授与にて)から「このタイミングで(博士号を)取らないと、この先、難しくなるぞ」と強く勧められて、とにかく形にしなればと、がむしゃらに論文に取り組んで、無事、授与されたのは2014年の9月でした。なんか、いつもぎりぎりなんですよ(笑)。

修了後に専門職に就こうと固執すると、良い職に就けるか不安になることもありますよね。僕も、大学院へ進むとき、「修士で骨(化石)をやりたい」と話したら、安藤先生から「お前んちは、家業はあるか」って(笑)。安藤先生はそこまで心配してくれる方だったので、僕は恵まれていたなと思

ます。家業がないにも関わらず(笑)、「一人で食っていくだけなら、困らないだろう」と、根拠のない自信があって、それがよかったのかもしれないね。

ここ、福井県立恐竜博物館は国内では珍しい地質・古生物学に特化した博物館です。勝山市北谷町の発掘現場では、平成元年以来、今でも夏に発掘調査を行っていて、毎年多くの恐竜化石が発掘されています。恐竜だけでなく、カメやワニ、哺乳類、貝、植物など様々な生物が化石として見つかります。国内外でのこうした調査研究に加え、シンポジウムや特別展などでの海外研究機関との交流・提携、そして教育普及活動にも積極的に取り組んでいます。

僕の主な研究テーマは、囃らずして(笑)、カメの中でも特にスッポン類の進化となっています。福井県の発掘現場で調査しているのは、約1億2千万年前の前期白亜紀という時代の地層(手取層群北谷層)なんですけど、ちょうどこの頃にスッポンは一般的なカメの形態から現在の姿(扁平でつるつとした皮膚状の表面をもつ柔らかい甲羅)へと変貌を遂げてるんです。北陸一帯に分布する手取層群の別の地層からは、もっと原始的なスッポン類も見つかっていて、どのように進化したのか段階的に追えそうだということが分かってきました。タイや中国など海外との共同発掘も行いながら、東アジア沿岸域でのスッポン類の進化に着目して研究を進めています。

heritage



学生時代から本格的に使っていたルーペや腕時計は今でも使っています。ハンマーは一昨年、発掘現場で無くしてしまって、残っているのは、ケースだけです。野外観察等の実習など、海にも、川にも、砂漠にも出かけています。腕時計は子どもの頃に父が出張先などから買ってきてくれた思い出の道具なんですよ。

message



好奇心の赴くままに、学生のうちにどんどん、国内外を問わず積極的に学外へ飛び出して欲しいですね。ある程度お金はかかっちゃうけど、その気になれば成田や羽田も近いし、自由に動けるのは今のうち。そこから一気に世界がバッと広がることもあると思うので。待ってるんじゃなくて、ぜひ攻めの姿勢でね。

取材協力: 福井県立恐竜博物館(福井県勝山市)



茨大の旬な話題と粋な取り組みを紹介します

Community
地域



茨大生に愛されて31年 水戸キャンパス前の「宝珍楼」が閉店

茨城大学の学生・卒業生たちが多く通っていた、水戸キャンパス近くの飲食店「宝珍楼飯店」が、2月27日、多くのファンに惜しまれながら閉店しました。

宝珍楼が開店したのは1988年9月。満点のボリュームと低価格、豊富なセットメニューでオープンから学生たちに人気を博しました。特に人気のあったメニューは、「青中」と呼ばれる青菜中華丼。素揚げしたほうれん草と豚バラ肉を甘さと香味あふれるタレであわせ、大盛りのライスに乗せた一品です。

サークルの新歓イベントでも愛用され、店内の壁には「四天王セット(剣道部)」「ジャズ研セット」「ペガサス丼(バレー部)」「しのぶどんぶり(ラグビー部)」などユニークな名前のセットメニューの掲示が並んでおり、それも宝珍楼の名物になっていました。

2月15日に閉店が発表されると、週末を中心にお店の前

には人だかりができ、その様子は新聞などでも紹介されました。茨城大学の卒業生も全国各地から駆けつけ、青春の味を懐かしんでいました。また、お店には常連のお客さんなどから贈られた花束や色紙が飾られ、多くの学生たちに愛されていたことを物語っていました。

マスターの木ノ内久雄さんは、茨城大学の近くでお店を続けてきたことについて、「ここは私のふるさですよ。飽きっぽい私が31年間もやってきたんですから。それは若い人と話すのが好きで、この場所にも自分が合っていたということですよ」と語りました。

※最終日の様子取材した詳しい記事をホームページでお読みいただけます。
<http://www.ibaraki.ac.jp/commit/2019/02/271816.html>



工学部建築コースの学生たちが日立の空き家をシェアハウス&地域交流拠点として再生

人口の流出によって空き家の急増が問題となっている日立市で、茨城大学工学部都市システム工学科の建築プログラムの学生たちが、空き家を自らの手で改修し、学生が住むシェアハウスと地域交流拠点を兼ねた建物に生まれ変わらせました。

空き家対策という課題に取り組むことになった学生メンバーたちは、まずどんな場所にしたいかというアイデアを出し合い、シェアハウス兼地域交流拠点をつくるという結論に至りました。その後、日立市のコーディネートのもと、いくつかの物件の実地調査やオーナーへの交渉を行い、設計を進めてきました。

2018年11月から始まった改築作業にあたっては、茨城県建設士会日立支部のみなさんから全面的な協力を得て、学生たちは現役の大工さんの指導を受けながら、畳はがしやフローリングなどの作業を行いました。プロジェクトのリーダーを務めた工学部3年の飯塚柊斗さんは、初めての施工作業に取り組みながら、「図面ではただ『フローリ



ング」と書けば済むことが、こんなに大変なことだなんて」と驚いていました。

こうして出来上がったシェアハウス&交流拠点は、1階と2階それぞれに大部屋と小部屋があり、1階の中央に共用スペースが設けられています。12月26日には近所の方たちを対象としたお披露目会が開かれ、多くの住民が訪れました。学生たちは2019年4月から実際に入居する予定です。

※取材した詳しい記事をホームページでお読みいただけます。

<http://www.ibaraki.ac.jp/commit/2019/01/072013.html>



宇宙の大発見に貢献する 世界最大の地上ガンマ線望遠鏡の天文台完成

ガンマ線望遠鏡は、宇宙から地球の大気圏に降り注ぐガンマ線からの光を捉えるものです。

ガンマ線が大気圏に突入すると、大気と様々な反応をした後にチェレンコフ光という青色の微弱な光が放出されます。望遠鏡では、パラボラ上の鏡面で光を集めたあと、その焦点に設けられた「ライドガイド」と呼ばれる装置でさらに集光し、カメラでチェレンコフ光の分布を捉えることでガンマ線のエネルギーや到来方向を解析するものです。茨城大学では、主にこのライドガイドを設計し、またシミュレーションによるガンマ線の解析手法の検討を行ってきました。

今年度、学生の中の最年長メンバーとして引つ張ってきた理工学研究所博士前期課程2年の三浦智佳さんは、ガンマ線解析手法の開発に取り組んできました。ライドガイドの諸先輩方の開発、三浦さんの研究の成果が初号機の観測に活かされるはずですが、「大学院修了までに実際の観測データに触ることができず残念でしたが、自分が興味をもっているガンマ線バーストの様子が観測されたという成果が、いつか聞けたら嬉しいですね」と三浦さんは語ります。

この巨大な天文台は、現代科学における最も大きな謎のひとつとされる「暗黒物質」を捉える、という大発見にも貢献するかも知れないとのこと。夢は大きく膨らみます。



©Gabriel Pérez Diaz, IAC

世界中の国々が協力して、世界最大かつ最先端の地上ガンマ線望遠鏡の天文台をつくらうというCherenkov Telescope Array (CTA) プロジェクトという壮大な計画があります。このCTAプロジェクトの重要な部分に、茨城大学理学部の教員と学生たちも関わっています。

この計画は、複数年をかけて世界に約100基の望遠鏡をつくるというものです。このほど茨城大学が開発に貢献している23m口径の望遠鏡の初号機が完成しました。

プロジェクトには2019年2月時点で33の国が連携しており、このうち日本国内では東京大学宇宙線研究所を筆頭に22機関が参加しています。このうち茨城大学からは、理学部の吉田龍生教授と片桐秀明准教授が継続的に関わっており、研究室の大学生、大学院生も一緒に研究に取り組んでいます。

PRIVATE INQUIRY

OBカメラマン瀬能啓太の**キャンパス探訪**
@ホームカミング編

今年で創立70周年を迎えた母校・茨城大学。刻み続ける歴史の重なりは、想像を超え、新たな学びや繋がりを生んでいく。「ホームカミングデー」での撮影は、自身の学生時代を回想するひとときでもあった。あの日、あの時、出会えた人たちへ敬意と感謝を込めて、大切に収めた写真を紹介したい。

1 廣瀬久美子さん

教育学部(音楽専修)・1959年度卒業

学生時代は、吹奏楽団に入っていたのですが、勉強よりサークル活動に一生懸命で(笑)。当時、講堂の脇に木造のサークル棟があって、毎日練習をしていました。茨苑祭ではジャズバンドを組んで演奏したり。すごく楽しかったですね。

2 多田眞浩さん(写真左2人目)

人文学部・1998年度卒業

山形の出身で、下宿生でした。勉強は楽しかったですが、同じような境遇の友だちと色々なことにチャレンジした気がしますね。職場(銀行)にも大学のOBOG会があって、学長はじめ、大学の関係者の方々が来賓として来てくださるんですよ。

4



学生時代は、楽しかったですね。もう戻れないですけど・・・、色々な経験に感謝しています。

5

辛い思い出ばかりですけど(笑)、漕艇部の経験が、今とても生きているんですよ。



この人びととの出会いが、人生にとって大きな出来事でした。

1



学生時代に力を入れていたことは、「学業!」と言いたところですが(笑)

2



6

サークル活動で関わった茨城ロボッツに勤めています。応援、よろしくお願いいたします!



7

大学での5年間は、映画三昧。私にとっては何より大事な時間でした。



3

自分の楽しかった経験を、今度は学生たちに伝えるのが自分の仕事ですね。



3 渡邊将司さん

教育学部(保健体育専修)・2001年度卒業

専門は陸上競技。部活一色でした。飲み会とか(笑)。先生方に恵まれた気がします。今、保健体育コースで(准教授として)教えています。学生たちには社会に羽ばたく前の、貴重な機会をたくさん作ってやれたらいいなと思っています。

4 萩原祥子さん(写真左2人目)

人文学部・2011年卒業

主人(雅人さん・理学部・写真専攻)とは大学時代に。卒業して2年後に結婚しました。隣におられる西野由希子先生にとってもお世話になって。常陸大宮で畑作業や草取りとか、農家の方々など地域の活性化のお手伝いをさせていただきました。

5 芝田崇徳さん

工学部(機械工学科)・1989年度卒業

昭和62年、那珂川近くの艇庫が台風で流されてしまっ。朝3時半に集合して、40-50分かけて旧講堂に置かせてもらった4人乗りボートを担いで、那珂川まで下ろしておいて、5時半から練習開始。辛かったですよ。でも、かけがえのない経験になりましたね。

6 佐々木知美さん

理学部(数学コース)・2017年度卒業

初めてのホームカミングです。サークルは放送研究会。バスケの試合って、趣味の世界で楽しむことはありましたが、ロボッツで熱量を燃やして、水戸を盛り上げられると知った時は衝撃でした。茨大がいかに地域に密着しているかを感じています。

7 村上主税さん

人文学部・1972年度卒業

本当なら(人文学部)一期生の卒業でしたが、5年行きましたから(笑)、2期目の卒業生です。映画が好きで、年間で300本も見くら。それが高じて東宝に就職しました。カンヌや釜山の映画祭、ハリウッドのスタジオも全部回りましたよ。

岡倉天心の茶の心



五浦コーヒー

茨城県北茨城市の五浦は岡倉天心ゆかりの地です。この度、国際人岡倉天心と関わりの深い米国ボストンのコーヒー史実に基づき、天心が五浦に建てた六角堂や『茶の本』に表された天心の思想“Teaism”から着想して茨城大学と一緒に再現したのが『五浦コーヒー』です。ボストンはアメリカンコーヒーの発祥地。アメリカンコーヒーの黄金期にボストン美術館に勤務していた天心と交流のあった知的富裕層が喫していたのは、軽くて飲みやすい「ブラジル」「コロンビア」のシティローストコーヒーでした。ネイティブのアクセントで「コーヒー」という天心の声を思い浮かべながら、百年前のモダンな味と香りをお楽しみください。



“Meanwhile, let us have a sip of tea. The afternoon glow is brightening the bamboos, the fountains are bubbling with delight, the sighing of the pines is heard in our kettle. Let us dream of evanescence and linger in the beautiful foolishness of things.”

Okakura Kakuzō, “The Book of Tea”(1906)

「まあ、茶でも一口すろうではないか。明るい午後の日は竹林にはえ、泉水はうれしげな音をたて、松籟(しょうらい)はわが茶釜に聞こえている。はかないことを夢に見て、美しいとりとめのないことをあれやこれやと考えようではないか。」

岡倉覚三著(村岡博訳)『茶の本』
(岩波文庫、1961年)

カップオン・五浦コーヒー (5袋入) 900円(税込)

カップの上に直接のせてお湯を注いでいただく簡単一杯どりコーヒーパックです。
カップオン・五浦コーヒー5袋/1箱 原産国:ブラジル・コロンビア



五浦コーヒーは、サザコーヒー大学図書館(水戸キャンパス)、サザコーヒーひたちなか本店にて販売中
また、北茨城市、高萩市内の飲食店などでも販売しています。
お問い合わせは、茨城大学社会連携センター(029-228-8585)または株式会社 サザコーヒー(029-274-1151)まで。